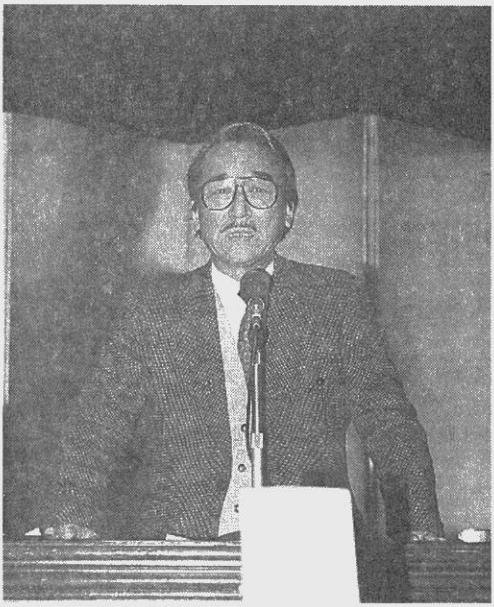
【第四回　下水文化研究発表会基調講演】

一滴の水

辰濃和男



おはようございます、辰濃でございます。新聞社というものはいつも朝が遅いもので、だいたい起きるのが遅いものですから今日は特別の早起きということになりましょうか。

正直申しますと、私は下水道のことは本当に専門でもなんでもないのでちょっとびびりまして、始めはお断りしたのですが、下水道のことに触れないでも雨水の話をと説得されましてお引き受けした次第であります。従いまして、余り皆様のご参考になることをお話することができるかどうか分かりませんが、水ということではやはり同じことで水というと雨水を貯めることも、それから流すことも、その流し方、流した水をどうするか、

これらはみんな一連のことなので、まあ若干関係があるのではないかと感じましてお引き受けした訳でございます。

みなさん雨をどうされてますか。私の家では、小さいのですが庭に二百リットルの水槽を二つ置いて、それで屋根に降る雨を受けとめています。結構植木への散水とか洗車とかには間に合います。まだトイレまではやっておりませんが、トイレもできると思います。これを始めたきっかけが、ニュージーランドの体験です。「雨水利用を進める全国市民の会」の会長になって、暫くたったある日、ニュージーランドに旅を致しました。ニュージーランドの海洋研究所の所長さんと話をしておりまして、私は何げなく「明日天気が悪くなるそうですね」とつい言ってしっまったのですが、その時その所長さんが、『辰濃さん天気に良いも悪いも無いでしょう。雨が降ると悪いというのはおかしくないですか』と言われて、私は雨水の仕事をしていながらそのような失言をして非常に恥ずかしかった記憶があります。

その町はレイという町で、全市雨水利用です。一軒残らず大きなタンクがありまして、雨水を貯めております。そしてこの研究所も研究所でありながら、雨水を利用していますし、私の滞在先のモーテルも雨水利用でありました。ですから、雨水を毎日々々利用している人にとっては、雨水への心理的距離感が非常に近い。私は、雨水々々と言って、国際会議を開いたりしていながら、自分の庭にさえ雨水タンクを置いてなかったということを多いに反省致しまして、帰国してから早速それを取り付けた次第であります。

取り付けますと、やはり私自身の気持ちの中で、非常に変化が生じて参りました。都会に住んでいると雨は鬱とうしい。道路を歩けば、跳上りがあるから汚ない、なんとなく嫌だ、陰気だ、そのような思いがあって、雨天の日は天気が悪い、雨は鬱とうしい。そういう気持ちというのが、人間正直なところあると思います。

この雨水利用というのは墨田区が盛んなのですが、墨田区のボランティアセンターというところ

がありまして、屋根に降る雨をみな地下に貯めています。その地下に貯めているボランティアセンターを管理している人と話をして、やはり彼もその管理をする前は、雨水というのはどうも薮とうしくてしょうが無いと思っていた。ところが、こちらにきて毎日々々地下に貯る雨水をみていると非常にいとおしい気持ちが出てくるようになり、そうすると自分自身の心の変化が非常に激しいというか、その雨によって自分の心が変わってゆくのが判ってきたということをいっておられました。

ですからまず雨水を貯めてみると何かが違ってくる。一番最初に夕立があって、屋根に降った雨が真新しい水槽にポタン、ポタンと音を立てているのを聞くと非常に良い気持ちで、まるで音楽を聞いているかのように気持ちがよくなってくる。そして段々と貯ってきて満杯になる。コックを開いてみると雨水がジャーとでてくる。このようなことをやっていると、水と自分との距離が非常に近づいてくるのがわかるというような感じを私は持つようになりました。

一滴の水ということをなぜ標題にしたかということですが、一滴の水と言いますのは、受け取る場合もそれを流す場合もみなおなじことではありますが、こういう話があるんです。二、三年前に、岡山県に曹源寺というお寺を訪ねました。行かれた方もあるかと思いますが、禅寺でありまして、三十人くらいの外国の雲水が修業しております。インド人、アメリカ人等がいてここで修業している訳です。私も、座禅に非常に興味がありますので、ここで数日修業致しました。その時に、曹源寺住職の原田老師が、こんな話をしてくれました。

昔（江戸の末期頃）儀山善来という非常に偉い僧がいたころのお話なのですが、この方が風呂（五衛門風呂）に入っていた時のこと、風呂が熱くなってきたので、雲水に水を持って来て欲しいと頼みますと、雲水さんが桶に水を汲み風呂に入れてくれました。丁度良くなったのでもう良いよと言ったところ、残った水を雲水さんが何気なく撒いたそうです。そうしたら、その善来和尚さんは、雲水に対して、その様にもったいないことを

するのではない、今の時期は余り雨が降らず、草木も皆水を欲しがっているじゃないか、余った水を撒く様だったら何故草木に撒いてあげないのだ、このように無造作に捨てる行為こそ、おまえに問題があるのだ、その水の一滴の大切さも判らないで何の修業かと厳しく注意した訳であります。一滴の水の大切さが判らないで、禅の修業をしてもしょうがないと叱り飛ばした訳であります。その叱り飛ばされた雲水も偉かったようで、和尚様の言うとおりだと言って、一滴の水の大切さについてないがしろにしていたと言って早速名を滴水と改めて修業に励まれ、後に関西で有名なお寺さんの一つである「天竜寺」の管長になられ、臨済宗の重鎮になられた名僧です。

この様な話を私は直接原田老師に伺ったのですが、帰ってきて、ふと水上勉さんの本を読んでいたところ、この話が書いてありました。水上さんによると、善来という僧は、若狭の生まれで水上さんと一緒の故郷ですから善来和尚の生家を訪ねたそうです。若狭湾に浮かぶ非常に貧しい島で井戸を掘っても水がなく、雨水を貯めて細々と水を使っていたという厳しい環境の中で善来上人は育った。だから不作で苦しむ両親の嘆きというものを心に刻みつけて育った訳でございます。

善来さんが、水には命があるんだといわれる背景には、このような歴史があるんだということを知られたそうです。

水は命を育むとか、水には霊力があるんだという考え方、これは、日本人の考え方の奥底にかなりあるのではないかと思います。いまでも相撲の世界では「力水」という言葉があります。水に力があるとか、正月になると「若水」というこれも水に霊力があるんだということから始まるのだと思います。

水についてのいろいろな話を総合すると、やはり日本人と水といいますのは、どこの世界でも同じなのかも知れませんが、とりわけ近しいものになっていると思います。

さて中国に行った際の経験です。中国の砂漠に行ったことがあります。蘭州という町から八時間

か九時間位列車にゆられて参りますと、トンガリ砂漠と言う砂漠がございます。その砂漠に行きますと、砂漠の真中にぽっかりとオアシスがありまして、木も茂っておりますし、日本でいう巨峯の様な葡萄も茂っているという非常に不思議な光景に出あいました。砂漠研究所の方が案内してくださったのですが、お話を伺いますと、この緑を作るのに三十年かかったという訳であります。

「三十年ですか。ところでどうやってこの土を運んだのですか」と質問しました、担当者がスコップを持って来て堀り始めますと、三十センチくらい掘ると底から砂が出てまいりました。つまり土の深さは三十センチでその下は砂漠です。言い替えれば砂漠の上に三十センチの土が盛られている状態であります。どうやって、この土を運んだのですか、と尋ねました。かなり広い面積部分に黄河の水を延々と引き、水を撒きます。一年水を撒くと一センチ土が積もるそうです。五年撒くと五センチ積もる。私たちはこのことを三十年やった。丁度三十センチ土が積もっているという訳であります。

これはまさに一年一センチの思想です。一滴一滴を積み上げて、何か大きな川の流れになりやがてそれが海に注ぐということと同じで一センチ一センチの土を毎年積み上げることによって三十年で三十センチの土を作るというこの気の長さ、そう言うものがいろんな運動を行っていく場合においても必要なんだなあと感じたことが一つ。

もう一つはやはり水の力の凄さということであります。水が死んだものであればいくら引いたって樹木は育つ訳がございません。水の持っているその中の泥、泥の中に持っているいろいろな命、有機物の命があるからこそ、そこに命が芽生えて、木が育ち緑が育ち果物ができ野菜ができるということ。やはり水というものはすばらしいんだなあとそこでも感じた訳でございます。

水とは一体何なんだということを私は中国の砂漠で考えました。水とは何か、そこで一番考えたことは、人間にとって水とは何か、人間にとって生きるうえで水とは何かということでございます。

ご承知のとおり、赤ちゃんは、お母さんの体内にいる時五週目で十ミリ、六週目で十五ミリの大きさになりますが、いつも羊水の中で生きている訳でございます。この羊水というものを分析すると、これは原始の海の成分とほぼ同じだと言われております。つまり原始の海の成分の中で赤ちゃんは、育っている訳であります。人間の命というのは、三十五億年の生命の歴史をふる回転のスピードで駈け抜けていると良く言われますが、生命の歴史が始まった三十五億年から続いているＤＮＡというものは、やはり海と関わりがある。海の存在なくしては、あり得なかった、ということでございます。

三十五億年前にみなさんご存知のとおり、原始的な細胞が生まれやがて高度の生物になり、と同時にＤＮＡも変貌を遂げ現在の様な形の我々人類がある訳でございます。私たちの細胞を調べると原始の海の成分と同じで、ということは私たちの中に三十五億年前の海が存在している訳でございます。私たちは海の中で生きているんだ、つまり三十五億年の歴史が私たちの中に詰まっていてその一番の基本になるのが水なんだということでございます。ですから、命のある存在だった水に、例えば、化学物質のようなものが入って来ると一体どうなるか。これは純粋な水ではなくて、化学物質に汚されたものになってしまったときに人間は非常に危険に脅かされるということだと思います。

水のことを扱っていらっしゃる方（水道・下水道の方）この方々は本当に私たちの命を守ってくださる第一線に立って働いてくださっているということで、私は本当に尊敬の念を抱くわけでございます。この方々が間違ったらもう私達の命は無いんだと、それほど水というものは大切なんだということを考えました。

それから例えば、諸橋轍次著の漢和辞典を調べてみますと、漢字集団で一番多いのはやはり水の字のある集団であります。さんずいとか、雨の付いた字とかありますが、この集団はその辞書で一千字以上ございます。他の文字よりははるかに多

く次に匹敵する文字というと草冠くらいかと思いました。この様に水と緑の漢字が多いということはそれだけ重要だったということではないのでしょうか。例えば、「泰然自若」という言葉ですが、この熟語の「泰」という字は、伸びやかな人が、水と共にいる、つまり水で汚れを落して伸びやかな状態になっているというのが、「泰然自若」の意味でございます。水というものはそういう作用を持っている訳です。あるいは、「供給需要」という字がございますが、この「需」という文字は、雨の下に「しこうして」の字を書きますが、これはそもそもの意味は、雨乞いをしているという意味であります。と申しますのは、「雨」冠は雨のことで、「而」という文字は巫女を表しておりますので雨を祈る巫女ということになります。雨乞いの時に雨を賜れという歌が沖縄地方に今も残っておりますが、需は雨乞いの人という意味になります。「雨」と「而」で雨を求めるということで需要の「需」という言葉ができている訳でございます。この様にいろんな形で、水というものは私たちの生活の中に溶け込んでいるんだということになります。この他、奈良の東大寺の「お水取り」の儀式も聖なる水への信仰が残っている証明の一つでしょう。

さて、私が雨水の仕事を始めましたのが「天声人語」を書いている頃からでございます。ここでちょっと「天声人語」の裏話を致しますと、「天声人語」というものは、実は一人で毎日書くものなのです。交代で書いているのではと思われる方もいらっしゃると思いますが、担当している時は毎日一人で書き上げている訳であります。ですからかなりヘビーな仕事です。東京にいるだけではストレスがたまりますので、時折各地に行って書くこともあります。ある年の暮に沖縄の波照間島に行きました。実はこの島には何回も行ったことがあるのですが、最初のころは水道が無く「雨水」「天水」あるいは地元の言葉で「玉水」を使用していました。天水でお茶などを飲んでました。二回目に行った年の暮には、既に水道が完成していたにもかかわらず、お茶をいただく時には、何故

か「天水」なんであります。そこで何故「天水」なのですかと伺いますと、こちらの方がおいしいからということでございました。と申しますのは、この島では、農薬がかなり使われておりますので水道の水に消毒用の塩素を多くいれておりますから、「天水」の方がおいしいといって大切に使っておりました。そして正月になると「若水」の習慣があって、聖なる井戸から水を汲んで神前に捧げるという伝統が残っております。一滴一滴の水を非常に大切にされながら暮らしているということを見ました。ひるがえって東京の私自身は何なんだ。湯水のように水を使い、それを海に流す。東京では、二十数億トンの雨が降って、そのうちかなりの量の雨水が、海へと流れてしまっているのであります。その代り二十億トンの水を上流から引いている訳であります。波照間の人は、そういう無駄なことはしない。一滴一滴の水を大切にしている。やはりなんとかしないといけないんじゃないかと思いまして、「天声人語」に非常におこがましいのですけれども、「今年から私はささやかではあるけれど雨を捨てないキャンペーンを一人でもやろうと思う」という様な宣言を致しました。それから天声人語で本当に何回も「雨水」を貯めよう、利用しよう、活用しようという記事を書き続けた訳でございます。

その時に、墨田区の保健所に努めている若い人たちが、何人か訪ねてきまして、キャンペーンを一人でやっている者の顔を見に来ましたといって朝日新聞社を訪ねていらして、その中の一人が、村瀬誠さんという方です。村瀬さんは、昔から雨水利用の運動をされていた方で、それが行政と新聞との出会いとなった訳でございます。行政と新聞が上手く手を組むかどうか、ということはとても大事ではないかと思います。さらに市民ももちろん、市民が一番重要ですが、市民、行政、新聞、新聞は一応市民の代表ということで、この三者がいかに仕事を進めることができるかということが大変大切なことと思います。村瀬さんが、とにかく一緒にやりませんかと、私たちの背後には、墨田区の雨水利用をしている市民がたくさんいるん

だと、私たちは、行政の側からやりますから辰濃さんも新聞で私たちと一緒にやってくれませんかといわれました。

それでお話を伺いますと、村瀬さんたちは、国技館の雨水利用をやっている。国技館の雨水利用については、みなさんご存知かも知れませんが、大きな屋根に降る雨が全部下水に流れると大変なこと（都市洪水）になりますので、雨水利用を村瀬さんが進言したのが一つでございます。もう一つは、雨水を貯めれば、その水がトイレなどの雑用水に利用できるので得になるだろうという訳で相撲協会を説得して地下に水槽を設けさせた訳であります。今、東京都内で雨水利用を進めているビルというのは、多数ございます。例えば、東京ドーム、大正海上火災、日本ＩＢＭビル等がやっております。墨田区においては、公共施設は全部雨水利用を行っております。各地の市役所の庁舎では、雨水利用は常識となっております。

この様に普及して参りましたのは、時代の流れがその方向に向いてきたからではないでしょうか。

そして、わいわいやっているうちに、国際会議でもやってみようということになり、墨田区の住民が、手弁当で集まり、ボランティアが中心になって、かなりの規模の国際会議ができました。アジア、アフリカ、ヨーロッパ及びアメリカ等の世界各国から人々が集まって、有意義な会が出来ました。この会議で確認したことは、雨水利用はこれからもどんどん進めて行くことです。雨水利用ということは、日本だけではない、世界的な潮流である。ヨーロッパでもある、アジアでは特にある、アフリカにもある、いろんな形である。動機はいろいろでありますが、一番は、人口の都市集中により、都市部の水を賄うことができなくなっている現実があります。

例えば、タイにおいては、小規模のタンクを配布する運動を展開したり、シンガポールでは、飛行場に降る雨を全部を貯める等、第三世界でも盛んであります。それから、先進国でも北欧を中心として、ドイツ等においても雨水利用が盛んになっております。この様に人口の都市集中というこ

との外に、エコロジカルな気運が盛り上がってきて、雨をきちんと貯める方が自然の生態系を守るには、大変すばらしいという気運が出て参りました。

私たちが国際会議をやった後に、今までの組織を換えて、先程紹介がございました「雨水利用を進める全国市民の会」というものを作りまして、現在はさらに国際的な雨水センターというものを設立できないものかという検討を行っております。そういうものができれば、それは世界の雨水利用の情報受信基地にもなるし発信基地にもなる。それから、市民や企業の人が雨水利用をするときの相談所として、多数の資料を集めて素晴らしいアドバイスの場となるでしょう。この様に、雨水センター設立を考えております。村瀬さんの努力で、自治体連絡会議ができて、六十から七十の自治体が加入していて雨水利用の設備に如何に助成をするかということ、そういう仕事も始めております。

何故、それでは雨水利用なのかということと、これは何故下水の文化が問題になるのかということとある意味では重なるものと思います。雨水利用の理念として、私たちは三つのことを考えております。

第一に、循環ということでございます。

循環と申しますのは、下水道に従事されている方が、日々身にしみて感じていらしゃる事と思います。昔は、私の家にも井戸がありまして、井戸から水をくんでいました。井戸のそばに溝みたいなものがあって、水を流すとそこを通っていつの間にか地面に浸透してしまう様になっておりました。土壌浄化法とでもいうのでしょうか。先程、開会の辞のときにもお話がございましたが、江戸時代の頃には、ゴミと屎尿、雨水というものはみな分けて処理されていた訳でございます。海外では、例えばフランス等では、みなごちゃまぜでありましたが、日本の場合にはこのことがきちんと分別するというシステムがございました。私の子供の頃も、天水桶がありました。地に降った雨は、地下にしみこんだり、河川に流れたり、蒸発したりそして海に注ぐ。そして又蒸発して循環してゆ

くという、生態系的な循環というものが機能しておりました。

これがある時期からずたずたに断ち切られてしまった訳であります。これは、文明というものの一つの宿命のようなものですが、土の道はぬかるみになります。ぬかるみよりは舗装されていた方が良い、木造家屋よりも高層ビルの方が良い、コンクリートが良いんだという、そのような文明の欲求というものは、私たち自身の中にあるのだということは否定はできません。そういうことで都市というものは、コンクリートやアスファルトで埋まってしまった訳でございます。水は下水に流れざるをえない。コンクリートの下の土は死んでしまう。ということで循環というものがどんどんと断ち切られていってしまう。

怖いのは、この様なことで気候まで変わってしまうことです。近年の夏の熱帯夜というものは昔はどんなに暑くても東京の夜で二十五度を越えるということは非常に少なかった。私の子供の頃の家屋というものは、夏は蚊帳で窓を開け放しておけば風が吹いて、緑もありましたし、過ごしやすい夏だった記憶があります。今日のように、都市から河川が消え、沼が消え、水が消えていってしまった状態では、例えば、三十度の時では、照り返しの激しいコンクリートの所では、四十五度にもなるそうです。これが夜まで残って、熱を放射する訳ですので、熱帯夜になるのは当然であります。これはなんとかしなくてはならない。都市の再改造、都市にそのような熱帯夜が起こらないようにするにはいったいどうしたら良いかと、これは、やはり水の行政が大切なことになって来ることになります。

これは何も雨水利用という問題だけでなく、水環境をどうするかということをみなさんで真剣に考えなくては解決しない問題ではないか、そういうことになっていると思います。

広域下水道について、専門家の前でどうとか言う勇気はございませんが、ただ大きな技術と小さな技術ということ。これは今私たちが真剣に考えなければならないことではないのでしょうか。

雨水利用と申しますのは、もともと小さな技術の集積です。循環ということを考えた場合に例えば、汚泥を農地に返すという形の循環、下水道と汚泥肥料の関連付けを如何にするかというようなこと、このことは既にかなりの地区で行われておりますが、この様な形の循環というものが、日本では、屎尿を農地に返すという循環が、ずーと前からあった訳ですけれども、そういう新しい形の汚泥を農地に返すことが必要ではないのでしょうか。

これには、かなり小規模の政策があって良いのではないのでしょうか。厚生省の下水道の元締だった方が後に大規模下水道工事に代る小規模の下水道処理の研究を始め、大規模下水道工事の疑問を呈したということ。このことは、研究会の会員でいらしゃる岡並木さんのご本にも書かれている事で、岡並木さんの「舗道と下水道の文化」でしたでしょうか、とても素晴らしいことがこの本には書かれてあります。

循環を如何にするかということ、これは雨水利用ということにとって一番大切な理念であります。生態系を元の通りにしよう、水の生態系を元の通りにしようということです。

第二は、自立ということであります。

都市に無数のミニダムを作ろうじゃないかということでございます。一軒一軒がきちんと雨を貯めてゆけば、これは相当な量になるだろう。村瀬誠氏の計算によれば、あくまでも計算だけですが、都内の戸建てやビルできちんと屋根に降る雨を貯めれば、優にダム一個分の貯水量に相当するという計算であります。上流の水に頼らないで、私たちがそれぞれ都市で少量でも良いから貯めていくということ、私たちは、水源自立と言っております。水を流すときの流し方、自分たちが使った水を自分たちで処理をするという考え方に重なりあうのではないかと思います。もうダムさえ作れば良いということではなくなっているのではないのでしょうか。今年の一月だったでしょうか、十三箇所のダムの工事を見直すという記事がありまして本当に怒りを覚えました。例えば徳山村に作る

予定であったダム、あれは何千億というお金をかけて、村の人を全部引っ越しさせて、当然そこにあった村の伝統など幾重にも積まれた文化などを根こそぎめちゃくちゃにしてしまった訳でございます。この様な自然破壊、文化の破壊というものをやってしまってから、今になって見直すとはなにごとか。それなら何故ずさんな計画を立てたのかということ。それだけの自然や文化の破壊をしてしまったことの責任は一体誰が取るのでしょうか。

更に都市が無数のミニダムを持っているということは、災害の際非常に強力な役割を発揮します。神戸の震災の際に、私たちの会で百個ほど天水尊を送りましたが大変に喜ばれました。やはり災害の時に一番大切なのは水だということであります。災害の起こる前から水の備えがあれば、あれほどの火災にならないですんだのではないかと思いますし、災害後にはトイレの水がないと困る訳であります。　このことから各家庭が、小さなダムを作っておくことは、何かの際に非常に威力を発揮するんだということでございます。

第三は、融和ということであります。

雨水との融和。もう蛇口をひねれば、水が出てくるということが当たり前になると、水道の水と雨水が結びつかない訳でございます。これが一滴一滴の雨水から生まれて水道の水になるんだということがわからなくなる。ただひねれば水が出る。雨と人間との距離が、離れてしまう。冒頭に申し上げましたように、雨の日は天気が悪いと言うようなことをつい言ってしまう訳であります。雨には申し訳ない訳ですが、どうしてそうなったかというとやはり文明の一つの必然的な結果です。文明性の原理と自然性の原理ということを常に念頭において考えなければなりません。

人間の心の中に存在するのは、自然性の原理であるはずなのですが、ここ何百年余りは文明性の原理が貴重なもの、大切なもの、貴いものとされてしまったために起こる現象というものが、私たちのあらゆる暮らしを支配してしまっている状態になりました。それによって、水が本来の命を失

ったものになってしまったという現象が残っている訳であります。

その一環としてやはり、都会人と雨の距離というものが遠くなっていってしまった。所が、日本人と雨というものは、ものすごく密接な不可分の関係にあって、例えば、昔の流行歌を見てみますと一番多い言葉は、「雨」と「涙」であります。それからいまでも、中島みゆき等の若い人たちの歌詞を見ますとよく雨という言葉が出てきます。失恋と雨というものは密接に結びついている訳であります。それは何故か、歌を歌うときに雨が出てくるのかということについて、既に亡くなられた方ですが、国語学者の池田弥三郎さんが分析されております。田植えと雨というものは、非常に密接な関係がございます。このことから雨が大事であるということと、田植えの頃は、昔は女性の方（五月女）はみんな身を清め、御篭りをし、田植えをしておりました。当時は、男女は雨の降る頃には別々になる訳であります。ですから雨が降るということと別れ別れのさびしさというものが、日本人の深層心理の中では、結びついているのではないかと言うのが池田氏の分析でございます。

おもしろい分析です。雨、淋しい、それから恋人、愛というものがどこかで結びついている。それほど日本人の意識の中には、雨が大切な位置を占めているんだということを言いたいのでありますが、それが不幸にして、どんどん雨と人との距離が離れてきてしまった。

そこで、雨水利用を進めることで距離を縮めたいと、雨の文化というものを考え直したいと、雨乞いの文化というものを考え直したいと、歌の中の雨、俳句の中の雨、和歌の中の雨、そういうものを全部考え直して勉強しようではないかということで、雨との融和、新しい雨の文化を創造しようということが、私たちの活動の第三の理念な訳でございます。

これら、一、二、三の理念に基づいて活動を行っている訳でございますが、なかなか大変でありまして、実際問題として、雨水センターの夢が果して実行可能になるのか判りませんが、しかしな

がら先ほどお話しました、中国のお話のように、一年に一センチ土を積む、それから滴水さんの一滴の水を大切にするという、そういうものに学びながら一歩一歩進んでゆきたいというのが現状でございます。

さて、今日お話をする時に何か行政と市民運動との関係について役に立つ話があればということでございました。良い知恵が浮かびませんでしたが、私自身は、一人の新聞記者として、自分でこの仕事はとにかく一生の仕事としてやろうと思っています。村瀬さんを中心にする役所の人たちも、一人でも多くの方に雨水利用をしていただきたいという努力をしています。それから更に雨水利用を考えている市民のみなさんと一緒になって、同じ志を持った仲間と共に頑張りたい。志とは何かと言いますと、志とは字の如く心を指すということで、何を指すかというと高い志をもって、自分の地位や営利を考えず、水というものが、危機にあるんだということ、始めに申しましたが、本来の水が本来の水ではなくなってしまったんだと、少なくとも水の行政に携わる人、少なくとも水に関心のある人、そういう人々が集まって、本来の水を取り戻す運動を進めようではないかと。志を同じくするということは、とても大切ではないかということが一つであります。

もう一つは、行政と市民、新聞記者の間で大切なのは、組織と組織の付き合いでは、だめなんだということを痛感します。例えば、北海道の知床地方で行っている運動に知床百平方メートル運動というのがありました。二十年の長きにわたって行われている運動で、「知床で夢を買いませんか」ということであります。開拓民が出ていってしまった後の農地を如何にするか、これを原生林復元したいというのが当時の行政の考えでした。ところが、行政（町）ではこれだけの土地を購入できない。県も国も買えない。黙っていれば大企業が買ってしまい開発を行ってしまう。それではどうするかということで、町が検討しておりました矢先、私も興味がございましたので、ナショナルトラスト方式を紹介しましたところ、町長さんが賛

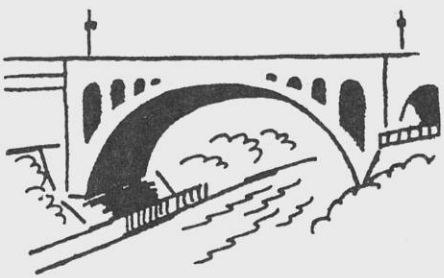
同してこの方式を実施することになり、そのことを「天声人語」に書きました。新聞を読んでいただいたみなさんから町に多数の寄金が集まり、その額が何百万円、何千万円になる。それからは、町の担当者が、週に一度の割合で、私の所に、その成果を報告してきます。それらの報告を読んでおりますと、その町の担当者や、賛同していただいた市民のみなさんの心意気が新聞記者の心を揺るがせることになり、町の担当者が本当にこの運動にかけていることが感じられ、ついまた筆をとって応援してしまうことがありました。これはもう町と新聞社の関係ではなく、町の担当者個人と新聞記者個人の関係です。この様に組織と組織との間でやっているうちは駄目なんだということの例であります。

付き合いというのは組織と組織の付き合いではなく、個人の名前と名前で付き合うことが大切なのです。それは、責任の所在を明らかにすることでもあるのです。私たちは、組織と組織の付き合いになれてしまってきておりますが、そうではなく本当に個人と個人との付き合いを大切にする。その場合志の高い個人同士、その志に感応しあう同士が力を合わせる、そのような形をとらなければ、運動というものは進まないのではないかということをかねがね思っております。

本日お招きいただきよけいないことを申しましたかも知れません。水の仕事と申しますのは、次の世紀にかけて一番重要な課題だと思います。私たちはたまたま雨水のことを勉強しておりますが、これからはやはり水を貯めるということだけではなく、貯めた水を如何に使うか、如何に処理するか、流すか、そして再生するか、循環して行くか、ということを勉強して行かねばなりません。

そうしますと、下水道を仕事にしている方も雨水を如何にためるか、循環して行く中でいろいろ研究発明をされ、私たちにいろいろなことを教えてくださるという関係が今後必要ではないかと思います。

一滴の水を貯めるより良い方法、一滴の水を捨てるより良い方法、一滴の水を循環させるより良

い方法、より良い再生の方法、それをみんなで力を合わせて水の文化あるいは水環境というものをより良くするために力を合わせて行く時代になってきているのではないのでしょうか。

日本人は、「道」という言葉が大好きなようであります。「柔道」とか「剣道」とか。「水道」というのはどうでしょうか。「水道」というのは、「剣道」や「柔道」と同じように水を単なるモノと考えず、水の文化を極める道、水環境を如何に良くするかという道、そういう意味での水道、この水道文化の向上のようなことを一生懸命やって行こうと思っています。今後、私たちの会のものが、下水文化研究会に何かとお知恵を拝借して行く、そういうふうに思っております。長時間雑駁な話をお聞きいただきましてありがとうございました。